

平成15年度学力向上フロンティアスクール中間報告

都道府県名	千葉県
-------	-----

I. 学校の概要（平成15年4月現在）

東金市立鶺嶺小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	2	2	3	2	2	3	2	16	27	
児童数	77	67	92	76	68	90	3	473		

II. 実践研究の概要

1. 主題（テーマ）

「確かな学力を培う学習活動の創造」

2. 研究内容と方法

(1) 研究の基本方針

文部科学省学力向上フロンティア事業指定を受け、「知育・徳育・体育」の各分野において、確かな学力を培う学習活動を創造していく。

子どもたちの基礎・基本的な学力が定着するように、日常的な研究・実践を進めていく。

①教科研究〈知育〉

少人数（算数）・国語・社会・理科の教科について、研究を進める。

②道徳研究〈徳育〉

道徳について、研究を進める。

③体育研究〈体育〉

昨年度と千葉県学校体育研究大会の研究の成果と課題とを踏まえながら、新しい体育の授業の視点を研究する。

(2) 少人数学習の実施方法と学年

①実施学年 1年生・4年生・5年生

②実施教科 算数

③学習団編成 どの学年とも1クラスを2人の教師で学習を進めていく「等質による少人数学習」「TT学習」「習熟度別による少人数学習」を行った。

④実施理由

算数科においては、個人差が激しく、児童一人一人の個性、能力、習熟度等に応じたきめ細か

な指導を行い、基礎基本を確実に身に付けさせたいと考えた。また、当該学年は1クラスの人数が35人以上と多いため、1クラスを2人の教師で学習を進めることにより、よりきめ細かな指導が必要であると考えた。

⑤コースの選択について

児童のコース分けについては以下のことについて留意する。

- ・新しい単元に入る前に事前調査等を行い、児童の実態を把握する。
- ・事前テスト等を基に児童がコース選択をする。
- ・単元途中のコース変更を認め、児童の個性や特性に合ったコースで学習ができるように配慮する。
- ・単元によっては機械的に分けたり、ドリル学習の時に分けたりするなど、コースを構成する児童が固定化しないように配慮する。

(3) 年次ごとの計画

平成15年度

①テーマ

「確かな学力を培う学習活動の創造」

②研究仮説

(仮説1)

児童の実態に合った学習具・学習材を開発し、それを生かした活用方法を工夫すれば、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

(仮説2)

学習内容を精選し、情意を生かした指導を工夫すれば、学習意欲が高まり、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

(仮説3)

児童自身が自分の知的・情的状況を知ることができる評価方法を工夫すれば、自らの目標に向かって、主体的に学習に取り組むようになり、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

以上を全体仮説とし、「国語・社会・算数・理科・体育・英語・道徳」の各教科・領域について、個々に仮説を立てて研究を進めた。また、今年度は1人1研究を原則とし、自分の担当する教科について児童の学力向上に努めた。

平成16年度

①テーマ

「確かな学力を培う学習活動の創造」

②研究仮説

(仮説1)

児童の実態に合った学習具・学習材を開発し、それを生かした活用方法を工夫すれば、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

(仮説2)

学習内容を精選し、情意を生かした指導を工夫すれば、学習意欲が高まり、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

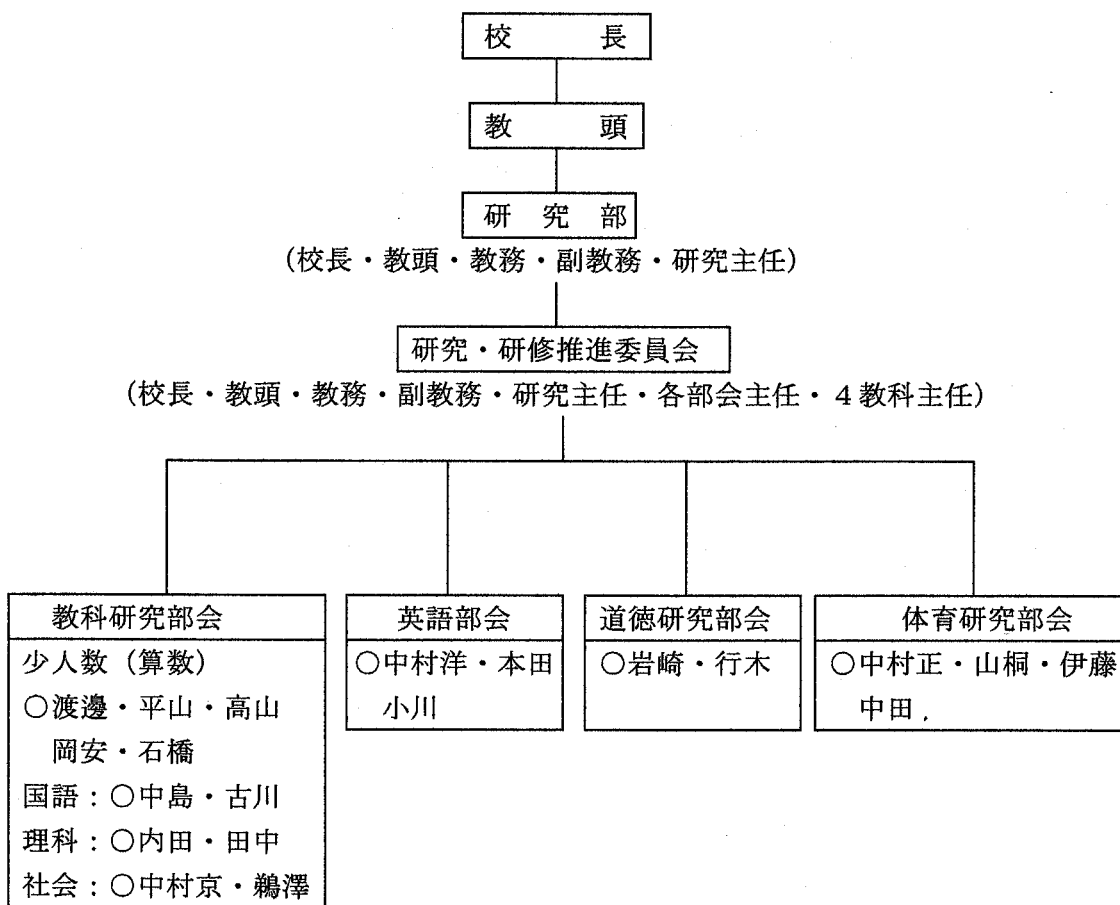
(仮説3)

児童自身が自分の知的・情的状況を知ることができる評価方法を工夫すれば、自らの目標に向かって、主体的に学習に取り組むようになり、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

平成15年度の自分自身の研究を学年や単元をより広めていき、児童が学力がより定着できるように努めていく。

(4) 研究推進体制

一人一研究を原則とし、各人で研究仮説等を立てていき、各人の研究の成果を部会に持ち寄り、全体へ還元していく。本年度の研究組織は以下の通りである。



Ⅲ 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

本校では1人1研究で、「国語・社会・算数・理科・体育・英語・道徳」の各教科・領域について、個々に仮説を立てて研究を進めた。すべての教科・領域について成果と課題を記すことはできないので、少人数学習を中心に進めてきた算数科の成果と課題について以下に示す。

算数科では、全体仮説から以下のように仮説を設定した。

仮説1：児童の能力や目的に応じた少人数学習の形態や学習計画を工夫すれば、できた喜びを感じ、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

仮説2：児童一人一人の考えを生かせる算数的活動の方法や、それを表現する場の設定を工夫すれば、学習意欲が高まり、基礎的・基本的な定着が図れるであろう。

仮説3：児童一人一人が自分の学習状況を自己評価できる方法を工夫すれば、主体的な学習になり、基礎的・基本的な内容の定着が図れるであろう。

以下に仮説ごとの成果を示す。

(1) 仮説1について

本校では、1クラスの児童を「基礎・発展コース」「基礎・補充コース」の2つのコースに分け、習熟度別学習を行った。しかし、児童の実態から、それぞれのクラスの中でも習熟度の差があった。そこで、導入時から、3時間目までは、習熟度別学習でありながら同一の学習内容を行うような単元計画を立てることもあった。このことにより、どちらのコースの児童も、基礎基本の定着を図ることができた。

「基礎・発展コース」では、問題そのものの難易度に負荷をかけたり、発展的な内容の問題を各時間に組み込んでいったりするということで、「基礎・補充コース」との違いを出すこととしたので、自分の能力やペースにより近い環境の中で、時間いっぱい学習することができた。

「基礎・補充コース」では、これまで問題解決に時間がとられることが多かった。問題の意味を理解できずに作業になかなか入れない児童や測定に必要な数値が分かっているにもかかわらず計算を間違えてしまう児童が多く見られた。自分一人の力ではなかなか答えにまでたどり着かない児童が多い。そこで、内容により、小グループに分かれて学習を進めることにした。学習の中で問題解決のために話し合わせ、協力し合って算数的作業を進めることで、児童の不安やとまどいや作業の負担を少しでも減らすことができ、楽しく意欲的に学習を進めることができた。

(2) 仮説2について

「基礎・発展コース」の児童は、自分と友だちの考えの相違を考えさせ、問題解決のためのよりよい方法を考えていく時間を多くとってきた。その中で、自分の考えを表現する活動を重視し、自分たちの考えを出し合うという相互活動によって、学習内容を自分の言葉で表現できるようにしていきたいと考えた。少人数学習という利点もあり、児童の発表回数は多くなってきた。また、友達の発表と自分の考えを照らし合わせて、さらに良い方法はないかと考える姿勢も出てきた。

「基礎・補充コース」では、算数的活動を数多く取り入れ、具体物の操作を通してより理解が深まるように教材を工夫した。掲示用・操作用の模型、マス目方眼紙、工作用紙、ジオボードなどである。また、5年生の四角形の授業では、実際に床に描いてある大きな四角形の面積を測定させることで、実生活との関連をイメージし、また実生活でも活用できるようにした。今までのような教科書やノートに入る大きさの形を測定するのは違い、大きな三角定規や1メートルものさしを使っている測定は、児童には目新しく新鮮な活動になり、各グループが一生懸命に作業に取り組んでい

た。

「基礎・補充コース」の児童も、少人数で学習している良さを生かし、問題解決の時間を多くとり、自分なりの考えを出し合う活動を十分にとるように心がけた。友達とは違う考えを自分の言葉で表現させる機会を持たせることで、主体的に、また自信を持って授業に参加できる態度を育てることができた。また、友達の考え方を聞くことを通して、自分とは違う多様な考え方を知り、その上でどの方法が最善なのかを考えさせるようにした。

(3) 仮説3について

毎時間にミニテストを行うことによって、教師は児童がその時間に身に付けるべき内容がはっきりした。また、児童にとっても、自分の力を確認する場となった。ミニテストは、コース別にその内容を変えたが、どちらもその時間に身に付けるべき、基礎的基本的な内容を2問から3問程度に絞り、児童の負担がないように工夫した。

授業の感想欄も、振り返りカードの記入を始めたばかりのころはなかなか記述ができなかったが、教師がその時間の児童の努力点や伸びを伝える一言コメントを毎時間毎に返すことによって、児童も徐々に記入するようになった。自分の学習状況を振り返ることで、1時間1時間の授業を大切にする姿勢が身に付けることができた。

2. 今後の課題

(1) 仮説1について

本校では、これまでの学習の定着度がさほど高くないという学年もある。このような学年の児童に「基礎・補充コース」と「基礎・発展コース」を選ばせると、「基礎・発展コース」より「基礎・補充コース」を選択する児童が多くいる。教師から見ても、その選択は妥当であると感じる。そうすると、「基礎・補充コース」を一人の教師で担当することが困難になってくる。これからは、TT学習を含めた多様な方法で、これまでの学習が定着していない児童に対応していく必要がある。

(2) 仮説2について

「基礎・補充コース」の中で小グループを作った場合、グループによってはなかなか活発な意見交換ができず、話し合いが先に進まないことがあった。一人の教師が、各グループを観察しながら回り助言するが、限られた時間配当の中では十分に助言できないグループも出てきてしまった。少人数学習という形態をとっているにもかかわらず、もっと教師の数が必要だと感じた。

学習集団を小グループ化しても、その構成メンバーによっては、活動や表現に際し、多くの指導・支援が必要になってくる場合もある。そのような状況を教師が素早く見極め、限られた時間の中で、効率よく学習を進め、まとめるという配慮・工夫が必要である。

(3) 仮説3について

原則として、授業の最後の5分程度をミニテスト・振り返りカードへの取り組みの時間としたが、なかなかその時間が確保できないことも多かった。児童にとって大きな負担にならないような取り組みにするために、さらに工夫が必要である。

仮説については、以上のような課題が明確にされた。これらの課題を解決し、本年度の研究をさらに深め、広めていけるように研究を進めていきたい。

IV 学力等把握のための学校としての取組

(1) 授業後のミニテストと振り返りカード

授業の最後にミニテストを行い、その時間の基礎基本がどの程度定着したかを確認した。このミニテストは、全ての児童が身に付けるべき内容なので、できるまで何回も繰り返し行い、内容の定着を図ってきた。

また、ミニテストと同時に授業に対する児童の意識を問う振り返りカードも行った。これは、教師が児童の授業に対する意識を目的的にはかるのもなので、「授業は楽しかったか」「授業は理解できたか」などを4段階で児童に聞き、授業の感想等を自由に記入してもらった。振り返りカードを行うことにより、児童の情意面をしることができた。

ミニテストも振り返りカードも、次時の指導に役立てることを目的として行い、児童が常に意欲的に学習に取り組める方法を考える一助とした。

(2) 千葉県学力標準検査の利用

年度当初に昨年度の千葉県学力標準検査を分析し、児童が得意としている教科や観点、不得意としている教科や観点等を明らかにし、分析してきた。この分析結果によって、児童が確かな学力を培うためには、どのようにしたら良いかを探ってきた。今年度も2月下旬に千葉県学力標準検査を行い、児童の学力の定着度を確認していきたい。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成16年1月29日に公開研究会を行い、郡内や県内の「フロンティアスクール」の指定を受けている学校へ案内を出し、本校の研究の取組と授業について公開を行った。

学校住所	東金市東岩崎24番地1
学校電話番号	0475-52-3402
FAX番号	0475-52-3447
メールアドレス	postmaster@tokigane-etg.chiba2.schoolnet.gr.jp